

あなたはどこにいるのか

奨励	木原 活信 [きはら・かつのぶ]
奨励者紹介	同志社大学社会学部教授
研究テーマ	ソーシャルワークの思想と哲学

その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。

「どこにいるのか。」

彼は答えた。

「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

(創世記 3章8—10節)

皆さん、おはようございます。社会学部の木原です。

私は、大学では少々難しい社会福祉の思想・哲学、精神保健福祉などの講義をしておりますが、今日はそんな難しい学問の話でなく、私が抱えている、素朴な「信仰と希望と愛」について、皆さんと分かち合いつつ率直に語らせていただきたいと思います。そういう意味で、今日の話はシンプルなメッセージです。それはたった今、司会者の方が読んでくださいました聖書箇所創世記をモチーフにした話です。3章8節からの、アダムとエバが罪を犯して楽園を追放されたという、皆さんご存じのあの話です。

罪と迷い

この聖書箇所によると、「その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れる」とあります。それに対して9節では、「主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか』」となっています。他の翻訳、たとえば口語訳や新改訳の聖書の訳では、「あなたはどこにいるのか」となっており、今日のタイトルはこの言葉からとりました。

実は聖書の根底には「罪」というテーマがあるのだと思います。何かそれが通奏低音のように聖書全体にずっと重く響いているように思えます。創世記の記述は、人類の最初の罪ですが、アウグスチヌスはこれを「原罪」と呼んでいます。これは昔々の他人事の話ではなく、実は私たち一人ひとりの罪について問われているようです。

つまり、人間にとって罪とは一体何なのかということに迫っています。聖書が言う罪というのは、犯罪などの法的な罪のことでなく、それは神から離れていること、神から逃げていること、あるいは神を無視することであり、本来の神を神として認めない的外れな生き方をしていること、そのような生き方、であると定義できると思います。その結果、神ではなく、自分中心に世界を回しているこうとする自己中心な生き方、これが罪に支配された生き方と言っているのだと思います。こういった罪という概念を宗教的に受け入れ難いと言うならば、人間のもっている根本悪とか、自分自身の悔みさの根本原因、そのように置き換えてもいいかもしれません。

今日のテーマでもありますが、そのような神を離れて自己中心に生きる罪の状況のなかで、本質を失ってしまった姿を罪であると聖書は表現していると言えます。つまり、このような人間は迷っている状態であると位置づけられます。そのような根本問題に対して、神は人に問いかける。それが今日のテーマになっている「あなたはどこにいるのか」という問いかけてです。

そこで、「あなたはどこにいるのか」という、この神からの問いを、三つの観点から一緒に考えたいと思います。

現在地はどこか

まずは一つ目。「どこにいるのか」という場合の我々の立ち位置である現在地について考えましょう。まさに今、私たちは、どこにいるのでしょうか。

ところで、皆さん、道に迷ったことはありますか、あるならそのときどうしますか。カーナビのように指示してくれれば問題ないのですが、実は私は学生のころ、カナダの田舎町を一人旅しているときに道に迷って大変困った苦い経験があります。それが、ロッキー山脈を彷徨したとか、大平原を横断したとか、そんな冒険物の格好いい話ならいいのですが、そうではなくて、自分の宿泊先に戻れない、ただそれだけだったのです。しかし、それが案外厄介でした。

道行く人に次々と道を尋ねるのですが、宿泊先が公共のホテルではなく、B & Bという英国風の小さな民宿で、外から見ると普通の家となら変わらないので誰も分からない。それでも、外国人の青年が困っている様子なので、優しいカナダ人たちは親切心で、「あっちへ行け」「こっちへ行け」と案内してくれました。もう何も分からないからそれに従って一旦は歩いてみたのですが、焦りも手伝ってか、結局分からないのです。

日も暮れてきました。おそらく4、5時間はあたりを彷徨っていました。本当に、泣きそうでしたよ。今は笑い話ですが、そんななか、ある屈強そうな男性—その方は必ずしも親切そうなお方ではなかったのですが、なにやら山登りに精通しているとかで、今まで案内してくれた人とは全く違うことを教えてくれました。「君は、そもそも自分がどこにいるのか知っているのか。さっきから行き先だけを必死で捜しているようだけど。それよりも、迷ったときは、まず、今、自分がどこにいるのかを知ることが何よりも一番大事なのだよ」と言って、手元の地図で、今私自身がいる地点、つまり現在地を指し示してくれました。すると、恥ずかしいことに、なんとその目的地の宿の裏庭が、すぐ目の前に見えているではないか！

「迷ったときは、今、自分がどこにいるのかを知ることが何よりも一番大事だ」というこの人の言葉が、今でも心に残っています。確かに、道を捜しているときに必要な情報は、目的地と現在地の両方です。しかし、私の失敗のように、必死であればあるほど目的地にばかり気をとられて現在地のことは忘れがちになります。現在地が分からなければ、GPSで自動的に現在地を指示してくれるカーナビなどは別として、いくら高性能の地図で自分の目的地がはっきりしても、それだけでは目的地に辿り着くことはできない。つまり、自分がどこにいるのかという現在地の認識がどうしても必要になります。

今は目的志向の高まりからか、多くの人が自分の短期、中期、長期目標などを設定して、懸命にそこに邁進しているようです。しかし、何よりも重要なのは、今自分がどこにいるのかという、原点と立脚点をまず確定させることではないでしょうか。これが不明確では、結局、堂々巡りになって、私の迷いの体験のように悲惨なことになってしまいます。

さて、聖書のアダムの場合、「あなたはどこにいるのか」というこの問いは、アダムに対して「あなたは迷っている、苦しんでいる、恐れているけれども、一体どこにいるのか」、つまり「自分の立っている現在地が分からないのではないか」という問いであったと思います。これが第一の問いの意味だと思います。つまり、迷っているときは自分がどこにいるのか、現在地を確認せよ、という点であります。この点、皆さんはいかがでしょう。今、自分の立っている位置を本当に把握しているでしょうか。

なぜ隠れるのか

二つ目。聖書に目を留めると、アダムは神を「恐れて隠れた」ようですね。ですので、「あなたはどこにいるのか」という問いのもう一つの意味は、「なぜ隠れるのか」あるいは「何を恐れて隠れているのか」という問いに置き換えることができます。アダムにすれば、それは神の言うことを聞かなかったからということでもあります。

哲学者のキルケゴールは、人間の不安の根源にあるもの、それは神からの離反、神から隠れようとしている人間の心、だと言っています。さまざまな心配事、いろいろなことがありますが、実は、真の神から隠れて離れて生きるというその生き方が、恐れの本質問題ではないかと思えます。

今となっては半分笑い話なのですが、私にとって非常に心痛い話をします。実は学生の前で話したことはないのですが、本邦初公開の恥ずかしい話です。それは小学3年生のときのことで、40年以上前ですかね。ちょうどそのころ我が家が新築の家を建てたときでした。家を建てて父と母は喜んでいました。その新しい家の、与えられた自分の部屋で、友達と相模をしていたのですが、壁に近づいたときに相手のかかとが壁のところにコツンと当たりまして、なんとその壁に穴が開いてしまいました。拳ぐらいの穴です。新築の家だったので、それは焦りました。狼狽して困っている私に、一つ上の姉が、アイデアを提供してくれました。「カレンダーを貼ったらいいじゃない」と。穴の開いているのは足下あたりなのですが、今から考えるとそんな低いところにカレンダーを貼るなどあり得ず、なんとも不自然なのですが、小学生の考えることですから、とにかく穴を隠したい一心でその提案に従ってカレンダーを貼りました。それで一瞬は、助かったような気持ちになりました。なんとか逃げ切ったかなど。でも、やっぱり心のなかでどこか後ろめたい気持ちがありました。

次の日、学校から帰ってきてよく見ると、土壁みたいなどころから砂のようなものがポロポロポロと落ちていました。それで日ごろ掃除なんかしない私が、慌てて掃除をしてそれらを取り除いたりしました。こうして、2日目、3日目、4日目、5日目と日にちが経ちました。ますます落ちてくる砂が増えてきました。当時夢のようになされていたのを覚えてます。ああ、どうしよう。その穴がだんだん大きくなるという夢です。それは実際そのように穴は大きくなっていききました。

さすがに、もうこれは逃げ切れなと思いまして。それからしばらくしたあるときですが、母が階下から「活信」と呼んだ、ちょうどその同じタイミングで、もうだめだと思って真実を余すところなく話しました。泣きながらです。そうしたら、実は母は、とくにお見通しだったようです。母はすでに知っていたのですが、あえて私が告白するのを待っていていたようです。両親は熱心なクリスチャンで、私も小さいころから教会学校で母から聖書の話が聞かされていました。母はこのとき、「あなたの心が痛んで、自分から言ってくれたこと、お母さんとしては嬉しかった。すぐに言えなかったのは残念だけど、自分の良心が痛んでこうやって告白できたことはよかったです。でも、黙っていたら辛かったんじゃない」と、私に対して、過ちを正直に悔い改める大切さを教えてくださいました。怒られると思っていたらそうでなかった。母はそのとき、詩編32編のダビデの詩を教えてくださいました。

いかに幸いなことでしょう／背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。いかに幸いなことでしょう／主に咎を数えられず、心に欺きのない人は。わたしは黙し続けて／絶え間ない呻きに骨まで朽ち果てました。御手は昼も夜もわたしのの上に重く／わたしの力は／夏の日照りにあって衰え果てました。わたしは罪をあなたに示し／咎を隠しませんでした。わ

たしは言いました／「主にわたしの背きを告白しよう」と。そのとき、あなたはわたしの罪と過ちを／赦してくださいました。（詩編32編）

私は、小さいながらこの詩が身にしみました。知識として分かったというより体感として分かりました。今、読む感覚と、また違いますが、恐れて隠れていると、誰でもしんどくなるのですね。人間とは、そういう動物なのです。この感覚を鋭敏にもっているのは人間だけと言ってもいいと思います。恐れて隠れる。良心が痛むという言い方をしていると思いますが、先ほどの「あなたはどこにいるのか」という神の問いからアダムは逃げ、隠れました。

さて、私たちはアダムのことを批難することができるでしょうか。いや、そんな遺伝子をもっているなんて考えたくないし、そんな罪はもっていないと、ここにおられる多くの方は思っておられるかもしれません。しかし私は自分の体験から、この性質は確かに自分のなかにもあるな、と認めざるを得ません。

一方で私は、一つのことを学びました。あの壁は、少年の私が手持ちの小遣いなどで簡単に弁償できるようなものではないでしょう。でも、しばらくしたら完全に綺麗になっていました。その後、すぐに両親は完全に壁を新しく張り替えたのでした。そのとき、「赦し」「贖（あがな）い」ということを学びました。幼い私は自分でどうすることもできない。弁償することもできない。自分で償うこともできない。罪というのと同じで、自分で努力して解決しようと思っても不可能で、神があなたを赦すから赦されるのだということ。それはキリスト教でいえば、イエスの十字架における神の一方的な赦しということになります。そもそも赦されたからこそ、こんな恥ずかしい話を今話すことができるのです。私にとっては、もはやそれは赦された過去の話になっています。

帰ってきなさい

三つ目。「あなたはどこにいるのか」というこの問いかけにおいて意味するものは、それは実は「帰ってきなさい。戻っておいで」という意味を含めた問いかけだと思えます。キリスト教の伝えるメッセージの本質は、罪人の招き、失われた人、罪人を探すために来たという、このイエスによる「招き」であろうと確信します。それが聖書の説く「良き知らせ」としての福音です。信じるか信じないかは別として、一人ひとりが神に招かれているのだということだと思えます。

確かに、この罪を犯したアダムは楽園を追放されました。でも、結末に神の側が「革の衣をつくり彼らに着せて」という表現があります。非常に意味深いと思えます。神学的な意味について私は言える立場ではないのですが、革の衣をつくれれば、そこに流された血があったと思えます。でも、それを犠牲にしても神の側があえて衣をつくって、裸である彼らを覆ったというなかに、私たちへの神の配慮（愛）を感じます。「あなたはどこにいるのか」という問いには、その意味で「帰ってきなさい」、つまり「待っている」という呼びかけが込められているように思えます。それは、反省して修業をして良い人間になってから戻ってこい、というのではなく、「いい格好をする必要はない。それは絶望や弱さの真っ只中でもかまわない。罪にまみれたその姿でかまわない。屈辱と苦しみの中でもかまわない。ただありのままでもいいから帰ってきなさい」というメッセージであろうと思えます。

皆さんは迷子になった経験はありますか。私も3歳、4歳のときに迷子になったことがあり、今でも覚えています。そのときに必死に捜してくれたのも母親でした。私も今、3人の子どもがいますが、子どもが小さいころ買い物に行ったときに、1人の子がいなくなりました。そのときに親としては悲壮で、必死で捜しました。聖書が言う、「いなくなった者、失われた者を探すために来た」というイエスのメッセージは、まさに神のメッセージであろうと信じています。「あなたはどこにいるのか」と言って突き放すのではなく、あなたが迷子になっているならば、それに対して親が必死で叫んで捜すように、一人ひとりのことを神は大切に思って捜そうとしているのだと思えます。「99匹の羊の譬え」にあるように、その1匹の羊を捜し求めるイエスの姿は、私たち一人ひとりへの神からのメッセージそのものと言えます。

「あなたはどこにいるのか」、神からの問い

「あなたはどこにいるのか」—神からの問いに私たちがどのように応答するのか。それが私たちに与えられた一つの課題であろうと思えます。学生たちが卒業論文、修士論文、博士論文を書くとき、私が繰り返し言うのは、「問いをつくりなさい。問いを明確にしなさい」です。いい論文を書くには、問題意識、つまり「問いをたてる」というリサーチ・クエスチョンが肝心だからです。フランシス・ベーコン（Francis Bacon）が言った言葉で“A prudent question is one-half of wisdom”「思慮深い問いというのは知恵のもう半分だ」ということですが、核心を突いています。

つまり、問いというものが物事の出発点です。さて、神からの問いはシンプルです。「あなたはどこにいるのか」です。これに対して私たちはどのように答えるでしょうか。恐れて、隠れて、身を避けて、そして私がカレンダーでなんとか取り繕っていた、あのような振る舞いをしてはいけません。そのような姑息な振る舞いではなくて、素直に神の前に出ていくことを求められているように思えます。神は一人ひとりを、あらゆる状況、立場に関係なく招き入れてくださるのだということ、今日ぜひ、一人ひとりが覚えていただきたいと思えます。

今、果たして自分はどこにいるのか答えることができるでしょうか。「迷ったときは、自分の現在地を確かめよ」という先のカナダ人の格言は、人生すべてにあてはまるように思えます。学生のころのほろ苦い思い出がなぜか今鮮明に蘇り、人生の歩道で彷徨いそうになる自分に「あなたはどこにいるのか」という細い声となって、あの道案内をしてくれた屈強なカナダ人の声と重なって聞こえてきます。ご清聴ありがとうございました。

2013年10月9日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録

<HPでは傍点を省略しております。詳細は冊子体の『チャペル・アワー奨励集 291号』をご覧ください。>